松田道雄著

私の読んだ本

岩波新書

786

松田道雄著

私の読んだ本

岩波新書

786

松田道雄

1908年茨城県に生まれる
1932年京都大学医学部卒業
専攻—小児結核と成人結核との関係
現在—評論家
著書—「私は赤ちゃん」「私は二歳」「母親のための人生論」「私の幼児教育論」「おやじ対こども」(以上5点岩波新書)「赤ん坊の科学」「君たちの天分を生かそう」「小児科医の眼」「日本式育児法」「日本知識人の思想」「育児の百科」

私の読んだ本　　岩波新書(青版) 786

1971年5月20日　第1刷発行 ©

著者　松田道雄

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行者　岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布1-385
印刷者　白井倉之助

発行所　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　精興社印刷・永井製本

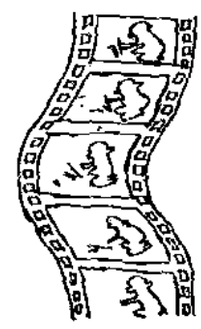
目　次

1　明治から大正へ……一
2　大正のころ……二三
3　大正から昭和へ……四五
4　昭和のはじめ……六七
5　満州事変からあと……八九
6　日中戦争のころ……一一
7　太平洋戦争のころ……一三
8　敗戦のあと……一五七

9　戦後十年たって……一七九
10　それからあと……一九九
あとがき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1　明治から大正へ



「おや、この子、字よんでんだよ」

私の読書の最初の目撃者は、父と同郷の大学生だった鈴木さんであった。この話は母から聞いたことで、もちろん記憶にない。おぼえているのは、天井からぶらさがったランプに照らしだされた仲小路の家の奥の座敷だけである。

それが明治四十三年であることはたしかである。京都に移り住んではじめて落ちついた聖護院の山王町の借家から、丸太町の仲小路にかわった年が明治四十三年で、その年に父が、絵入りの「イソップ物語」を買ってきてくれたのだと母はいう。

仮名の大きな活字の本で、上に話がかいてあって下が絵になっている本だったので、遊びにくる大学生たちは、私が絵をみて上の文章をそらでいっているのだと思っていたらしい。

工科の学生だった鈴木さんは、私にテストをしたのだろう。それで私が暗誦しているのでないことを発見したようだ。

茨城県から京都の大学にきていた学生は、そのころ三、四人しかいなかった。彼らは京都のことばが全然わからないので「ほだっぺ」などという茨城弁の通じる場所として私の家をたまり場にしていた。

小さい子が字をよむのが彼らにはおもしろかったのだろう。きそって絵本を買ってきて私によませたという。一種の早期教育だったわけである。だが、早期教育は読書幼年をつくりあげることにはならなかった。仲小路の家にうつってから、友人というものを知ったからである。

家の周囲には、活動的な幼児のエネルギーを十分に発散させてくれる遊び場があった。加茂川には三、四分でいけた。堤には護岸工事がしてなかった。草でおおわれたなだらかな斜面は、春はタンポポでかざられた。夏の夜は螢がとんだ。秋の午後にはキチキチと羽音をたててバッタがとびたった。正月には凧をあげる子が枯れ草の上を走った。

そとに出れば、かならず友人がいた。遊びにことかくことがなかった。ケンケン、メンコ、バイ、なわとび、ケッタ、オシロンボ。

道路の舗装してない地表は、自由な塑形をゆるす遊具であった。道路での子どもの遊びをさまたげるものがなかった。夕方になって、門から半身をだして母が呼ぶまで、そとで遊んだ。

本は必要でなかった。友人に本をよんできかせた記憶はない。字がよめることに優越を感じ

る機会がなかった。健全な時代だった。

母が月ぎめでよんでいた「婦人之友」から「子供之友」をだすようになって、はじめて定期刊行物の読者になった。雑誌を毎月とどけてくれた西川誠光堂という本屋さんとは、それ以後三十年つきあうことになった。

「子供之友」でおぼえているのは連載の犬の集団の話であった。集団的行動ができないポンコという犬が、いつもへまをやるのだった。集団の規律をおしえるつもりだったのだろうが、ポンコ君がいちばん好きだった。

学校にあがるまでに、どんな雑誌をよんだかおぼえがない。「幼年画報」とか「幼年世界」とかいう雑誌があったようだが、たのんで買ってもらった記憶がない。内容をばかにしていたのかもしれない。

「桃太郎」だの「カチカチ山」だのをあつめた赤い表紙の厚っこい本をもっていた。おそらく巌谷小波の「日本昔噺」だったろう。

大正三年に仲小路から烏丸蛸薬師に移った。父が大学をやめて開業するためだった。翌年、明倫小学校にあがって、急に友人がふえ、遊ぶのがいそがしくなった。町のなかには町のなかの遊びがあった。家に蔵書があったら、雨の日などよみもしたろうが、父のもっている本とい

えば医学雑誌とドイツの医書だけだった。それでも本箱にならんでいる本の背をみただけで、この本には絵がある、この本は字ばかりだということはいえた。小さい時から退屈なときひっぱりだしてみていたせいだろう。

母の本も実用書ばかりで、「婦人之友」のバックナンバーのほかは、小説のたぐいは全然なかった。

五年生になるまで、予習だの復習だのをしたことはなかったから、学習用の参考書ももっていなかった。辞書が一冊あったきりだ。

本をまったくよまなかったことは、文章をつづるすべを知らなかったことからもわかる。一年生の二学期に、御大典の記念にというのだろう、突然、それまでになかった綴り方をかかされた。たった一行しかかけなかった。「オドリニイコウカトオモッタケレドヤメマシタ」。

京都の大正四年の秋は最高のにぎわいだった。欧州大戦で軒なみ成金ができたことと大正天皇の即位式とがかさなったのだ。家の前の烏丸通りは駅と御所とをむすぶメーンストリートで、ここがパレードの花道だった。道の両側にはたかく造花の花環をつらね、電燈を点じて夜も昼のようだった。

毎晩奉祝おどりの列が「エライヤッチャ、バンザイ、バンザイ」といってねりあるいた。各

町内が意匠をこらして、仮装行列をくりだしたのだった。同級の生徒のなかにも、奉祝おどりに参加したものがいた。世をあげての行事に参加したことを誇らしげに教室ではなした。私の町内も参加したが、商家でない私の家を除外した。

一行しか綴り方がかけなかったことを、恥かしい思い出としておぼえているのは、家族総出で通りに面した部屋でミシン加工をしていた家のケンちゃんが、綴方用紙の裏までぎっしりかいて、先生にみんなの前でよんでもらったからだ。

文字でかいたものよりも、はるかに関心のまとになっていたのは活動写真だった。活動写真館のならんでいる新京極までは十五分であるいていけた。

最初に活動写真につれていってくれたのは、父が保証人になっていた同志社の女学生のみどりさんだった。「ナポレオン」というフランスでつくったものだった。「クレオパトラ」にもつれていってもらった。

「新馬鹿大将」という連作のドタバタ喜劇や黒いタイツ姿の女侠客がオートバイで活躍する「プロテア」だのも知っている。そのころ同居していた叔父につれられて、正月だとか休日だとかにみたのだろう。

活動写真の印象は絵本などとくらべものにならなかった。かつてみたことのない世界が目の

まえでうごき、想像を絶した事件が展開した。登場する女は日常には出あうことのない美しさだった。

新京極が近くなったからといって、活動写真はそう再三みせてもらえなかった。本ならねだればどうにか買ってもらえたろうが、活動写真は、あまりみると不良少年になるからといって、ゆるしてもらえなかった。「ジゴマ」という大盗賊のフィルムが上映禁止になったとかいう話もあった。洋画にかならずでてくるラヴシーンも子どもにはみせたくなかったのだろう。

恋ということばをおしえてくれたのはたしかに活動写真であった。字幕にもっともしばしばでてくる

"I love you."

を、こわいろをつかって「解説」する弁士が熱情をこめて日本語でいうのをきいたにちがいない。ほかであまりきかないことばを、写真を中断し、わからない字幕をみせておいてきかせれば、一年生にだって、どういうことかわかる。

二年生になって唱歌の時間に「紅葉(もみじ)」というのをならったが「濃いも薄いも数あるなかに」というところにくるとI love you.のシーンを思いだすのだった。

三年生まで月に一回ぐらいの割で活動写真をみた。あまりせがむので、母は薬局を手伝って

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

いた書生や見習看護婦を護衛につけて新京極へいくのをゆるしてくれた。

弁士がエンマと名づけた敵役とでてくるチャプリンやマック・セネットの喜劇もみたが、いちばん熱中したのは連続大活劇だった。追跡シーンに近づくと館づきの数人からなる楽隊がスクリーンのまえのボックスにはいってきた。いよいよ追跡になると館もゆるぐほどにトランペットを十分にきかせて性急な曲を演奏した。新京極に一歩はいると、もうその伴奏がきこえた。足が宙にうく思いで、「護衛」の手をひっぱって入場券売場にいそぐのだった。

エディ・ポローという屈強な俳優の演じた「快漢ロロー」とか、ケネディ探偵のでてくる「拳骨」とか、パール・ホワイト嬢主演の「鉄の爪」や「運命の指輪」とか、ルース・ローランド嬢が悪を思うと、あら不思議、手の甲にありありと環状のあざが出現する「レッドサークル」など、とびとびにみた。

美人や名探偵が悪漢につかまってレールにしばりつけられているところに、列車がだんだん接近してくると、また来週となるのだった。それでいつも西洋ものへの渇きがあるのだが、それは日本ものへの嫌悪によってさらにつよめられたといえよう。

めったに日本ものは、みなかったが、田舎からきた客が長く泊っていたときなど、お相伴した。

新派劇という現代ものは、やたらに泣くのがいやだった。旧劇は小さいときはこわかった。立ち廻りになると、舞台のよこで板を拍子木でたたくのが、館内にひびいて、とても大きな音がして生理的に不快だった。新派劇も旧劇も、女優がいなくて、男が女に変装した。グラマーのパール・ホワイト嬢やルース・ローランド嬢をみた目には醜悪にうつった。

それに旧劇の背景はロケーションばかりだった。嵐山とか仁和寺とかのよく知っている風景だから、西部の大平原の雄大なのに遠くおよばなかった。

西洋の活動写真は恋愛についておしえた以外、知的にはそれほどプラスにならなかったが、日本はおくれた国だという感情をふかくうえつけた。

連続大活劇はスリルとアクションを盛ったフィクションへの興味をそだててくれた。小学生のころによんだものをふりかえってみると、そういうものがおおい。

冨山房の豪華本の模範家庭文庫のなかで愛読したのは、平田禿木訳の「ロビンソン漂流記」だったし、「アラビヤンナイト」ではシンドバッドの航海だった。「西遊記」も好きだった。ラヴシーンを活動写真で何度もみたせいか、「グリム童話集」ではたよりなくて、王子さまに思いをよせる人魚の話などのでてくる「アンデルセン童話集」のほうが好きだった。

明治のころから出ていた実業之日本社の「日本少年」や博文館の「少年世界」とは別の世界

を子どもにみせようとして、「良友」だの「赤い鳥」だのが登場した。それは二年生から四年生のころだった。

「赤い鳥」はめったによまなかったが、「良友」は毎月よんだ。待ちきれないで発行日が近くなると、何度も本屋に足をはこんだ。吉野幹夫というフランスの飛行将校の遺児が活躍する連載がよみたかったからだ。宣統帝という清朝の幼帝がいることを知ったのも、その話からだった。関張元という忠臣と吉野少年とが、ドイツのスパイとたたかって、清朝を復興させるというのだった。筆者は金太郎という人だったが、誰のペンネームだったろうか。

話のどこかに湖底に鐘が沈んでしまうところがでてくる童話がたいへんおもしろくて、その作者が吉屋信子という女の人であったことをいつまでもおぼえていた。

原田三夫氏が毎号ノンフィクションをかいていられた。汽車や汽船の歴史だとか、図書館の話だとかが、絵や写真を入れてでていた。アレクサンドリアに何万冊もの蔵書をもった図書館があったことなどをおしえられた。

「日本少年」や「少年世界」には少年小説とか滑稽小説とか銘うったフィクションがのったが、子ども心にもすこし旧式だという感じはあった。そういう雑誌にのっている広告が、また、たのしい読み物だった。代金引換えで送ってくる空気銃だとか、火吹きダルマだとか、催眠術

の講義録だとか。

第一次大戦のすんだころ新しい少年雑誌がでた。ひとつは「海国少年」というので軍艦や汽船の写真をたくさんのせていた。樺島勝一という画家がペン画で船や波を丹念にかいた。これは大正九年からはじまる八八艦隊計画のキャンペーンのひとつだったのだろう。

もうひとつの「飛行少年」は飛行機の写真をたくさんのせた。欧州大戦に新兵器として登場した飛行機への子どもたちのあこがれと、民間飛行家養成の機運にのったものにちがいない。「飛行少年」には谷洗馬という馬の絵の得意な画家がかいていた。スリルとアクションの物語りは、この二誌のほうにおおかった。

月ぎめで買っていたのは「良友」だけだった。学校で「良友」と交換して他の雑誌を借りてよんだ。正月号だけは付録に双六がつくので、三つも四つも買ってもらった。

学校には図書館があったが貧弱なものだった。唱歌室といわれたオルガンとベンチだけの教室の一方の壁によせてつくられた書架にならんだ二、三百冊の本が蔵書のすべてであった。

冊数だけでなく、内容も貧弱だった。新しい本がなかった。忠臣孝子の話が主で、本がいたまないように、白い文庫紙の表紙がつけられていて、毛筆で書名がかかれていた。みただけでよむ気がしなかった。月曜日は二年生、火曜日は三年生というふうに曜日によって学年がわり

あてられていた。

学校には生徒に読書をすすめる風はなかった。京都の町のまんなかの古い商家の子ばかりの学校だったから、生徒もはかまでなしに前垂れをかけてきていた。親たちは子どもが商売人になってもらいさえすればよかった。なまじっか本が好きな人間などになられてはこまるのだった。上級の学校にすすむのは半分ぐらいで、それも商業学校だった。中学にいくものは、一級四十人のうち一人か二人しかいなかった。

学校の読書指導があったとすれば、それはよんではいけない本をきめたことだ。立川文庫（これはタテカワブンコと発音した）をよむことは禁じられていた。学校にもってきたらとりあげるといわれた。あんな字の小さい本をよむと近眼になるからいけないといわれた。だが、それより雲助が殿様のお姫さまをとりまくようなシーンがわるいんだろうと、こっちではわかっていた。

岩波新書の下四分の一をとりさったくらいの大きさの立川文庫は、どの本屋にもあった。立川文庫だけを入れる小さな三段か四段の書架にぎっしりつまっていた。商家に丁稚奉公している少年たちは、ほとんどがもっていた。出先きで番頭が店の中にはいって商談をしているあいだ、おもてにおいた「丁稚車」といわれる低い大八車の柄に腰かけて、荷の番をしながら立川

文庫をよんでいる丁稚君の姿をよくみかけた。番頭がもどってくれば、ひょいと懐に入れてしまう。はげしい出し入れに耐えるよう表紙は布製であった。

事実、立川文庫の活字は小さかった。六号で組んであるところに九号のふり仮名がついていた。よくでてくる「流石佞姦邪智の」だとか「咄嗟と」だとか「一伍一什」だとかは、「さすがねいかんじゃちの」とか「あなやと」とか「いちぶしじゅう」とかのふり仮名がなくてはよめなかった。

そんなこまかい字のよみにくい本にとびついてよんだのは、学校で忍術ごっこがはやったからであった。日本の活動写真業者は、あちらの連続大活劇に対抗して、特殊撮影をとりいれた忍術ものをつくりだした。尾上松之助、一名目玉の松ちゃんがヒーローだった。猿飛佐助だの霧隠才蔵だの自来也だの立川文庫にでてくる英雄を、尾上松之助はおそろしいスピードで画面に再現した。それが大正七年、四年生のときだった。

正月などに松之助の忍術ものをみたが、スピード感においてパール・ホワイト嬢のでてくる大活劇におよばなかった。

立川文庫にしても、そんなにたくさんよんだわけではなかった。子どもに立川文庫をよまさないようにという学校の方針に母は協力していた。おとなのよむ本は、子どもによませないと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com